

「仏説」とは、東アジア漢字文化圏ではスートラが「経」と翻訳されたように、時間を超えた真理としての無謬性を具え、絶対的な拠り所となるものとして理解されていた。金口の所説という言葉はそのことをよく示している。そして「仏説」は、釈迦自身がその一代在世中に説いた教えとして捉えられていた。しかしまた、その教説の内容については、すでに大乘『涅槃経』などの経典自身が説いているように了義と不了義の差別があることや、また教説間同士に相互矛盾するものがあることは認識されていた。

本発表では、中国・日本仏教において「仏説」がどのように理解され、解釈されていたのかということ、具体的に天台智顛と日蓮とを取り上げて、両者の「仏説」に対する解釈を検討することによって解明したい。智顛を取り上げるのは、中国仏教者の中で彼が極めて柔軟で宗教的に有意義な「仏説」の解釈を示しているから見られるからであり、日蓮を取り上げるのは、彼が自身の教学の基盤に日本天台を通して智顛の教学を取り込んでいて、その上に日本仏教の時代性を体現した思想を表明していると考えられるからである。

さて、仏説の教説間に見られる齟齬や矛盾を解決する解釈法として『大智度論』の説く四悉檀や、『撰大乘論』に出る四意趣が考案されたのは、釈迦の説いた教説は絶対的に無謬であらねばならないという仏弟子としての要請からであろう。いうまでもなくこれは仏の教説として説かれたものではなく、後世の仏教者によって考案されたものである。

またこれとは別に、中国仏教においてはアトランダムにもたらされる経典群を仏の説法の順序次第や内容の深淺によって分類配分し、自己の宗教的価値観に基づいて仏一代の説法の再配列を個々の仏教者が行ったのである。いわゆる教相判釈である。智顛は後に五時八教と称される教判を基礎に『法華経』を釈尊一代の教説の最高のもので位置づけた。その過程において、智顛は『法華経』の解釈として『法華玄義』と『妙法蓮華経文句』を講説しているが、前者の中で四悉檀について、「仏は四法（＝四悉檀）を以て遍く衆生に施す」といい、それを仏自身が具える衆生教化の際の説法の類別規範として捉えている。そのうえで四悉檀と五重玄義とを対応させて解釈している。また後者の『文句』においては四種釈を用いて経に解釈を加えているが、その第一の因縁釈は四悉檀の意義に拠って経文を解釈しようとするものである。このように四悉檀を重視しているが、智顛の特徴は四悉檀を仏の衆生教化の発現として解釈し、それゆえに「教」と「観」とが四悉檀によって起きるとしていることであり、この点がほぼ同時代の吉蔵が四悉檀をあくまで経典解釈法の一つとしているのと異なる点である。

日本仏教の日蓮は、日本天台を介して智顛の法華経観を継承した。そしてそれを切実な末法の時代認識のもとに先鋭化し、純粋な法華仏教による霊山浄土の建立を目指した。その過程で、たとえば『顕謗法鈔』に見られるように、仏説は「入理一」とはいうが、教説には深淺優劣があるので謗法ということがあり、開会の四悉檀、四意趣と未開会のそれらとを混同することが謗法であるとして、『法華経』を最高のもので位置づけるのである。このような智顛、日蓮の「仏説」理解は、その概念意義を拡充充実させるものであるといえよう。 <キーワード> 智顛、日蓮、四悉檀